

Title	<翻訳> 蛇舌グンラウグの物語(1)
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	大阪外国語大学学報. 27 p.57-p.81
Issue Date	1972-01-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80437">https://hdl.handle.net/11094/80437</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 蛇舌グンラウグの物語 (1)

菅原邦城・訳注

## GUNNLAUGS SAGA ORMSTUNGU (1)

Translated from the Old Icelandic with notes

by Kunishiro Sugawara

### Introductory note

Professor Sigurður Nordal (Formáli, in *Íslenzk Fornrit* III, Reykjavík 1938) states that *Gunnlaugs saga ormstungu* or the Story of Gunnlaug Serpent-Tongue is much more popular outside of Iceland than any other saga of Icelanders (*Íslendinga saga*). The reasons are not far to seek. This saga is short and of simple construction, the array of secondary persons is far smaller than in most other sagas, except *Hrafnkels saga Freysgoða*. Both the story and the author's treatment of it are well suited to the modern taste. The Saga of Gunnlaug is a romantic drama of passionate love and tender sentiment between two poets and a woman, filled with youthful affection, broken friendship, rivalry, chivalry, treachery and death.

This anonymous saga seems to have been written sometimes between ca. 1200 and 1300 at Borg in southwestern Iceland or one of the neighbouring farms. There exist two vellum MSS. of the saga: the older one from the second half of the 14th century (per. 4:0 nr 18, in the Royal Library, Stockholm) and the younger MS. from the 15th century (AM 556 4to, in the University Library, Copenhagen).

*Gunnlaugs Saga Ormstungu* edited by P. G. Foote (Nelson's Icelandic Texts I, London 1957) is used for the Japanese translation. This edition is chiefly based on the Stockholm MS. Besides Sigurður Nordal and Guðni Jónsson's Icelandic edition was used for general annotations and also Ludvig Wimmer's *Oldnordisk Læsebog* (10th ed., Copenhagen 1964) was used for the verse-readings. The latter half of the translation will be printed in one of the forthcoming volumes of *Journal of Osaka University of Foreign Studies*.

Osaka, September 1971.

I. ソルステインという名の男がいた。彼はエギルの息子で、エギルはノルウェー<sup>ヘルスイル</sup>の領主<sup>1</sup>＜晩の＞ウールヴの息子＜禿の＞グリーンムの息子であった。<sup>2</sup>ソルステインの母は、アースゲルズとい  
って、ビョルンの娘だった。

ソルステインは、ボルグ峡湾<sup>フイヨルド</sup>のボルグ (Borg) に住んでいた。彼は財産に富んだ大首領で、賢く柔和な男であり、あらゆることに穏健な人物であった。父のエギルのようには背丈も力も大きくはなかったが、それでもきわめて傑出した人物で、すべてのひとびとに人望があった。ソルステインは美男子で、金髪で、誰よりも美しい眼をしていた。彼は、フリーヴの息子グンナルの娘ヨーフリーズを妻にしていた。彼女は以前、＜トゥングの＞オッドの息子ソーロッドの妻で、かれらにはフーンゲルズという娘がいた。<sup>3</sup> この娘は、ボルグでソルステインに育てられた。ヨーフリーズは、非常に優れた女性であった。ソルステインたちには子供が多くいたが、この物語には数人しか出てこない。かれらの長男はスクーリで、二番目はコッルスヴェイン、三番目はエギルであった。<sup>4</sup>

---

(注の作成にあたって、引用文学作品については *Íslensk Fornrit* (=ÍF, I ff., Reykjavík 1933 ff.), 項目説明に関しては *Kulturhistorisk leksikon for nordisk middelalder fra vikingetid til reformationstid* (=KLNLM, I ff., København-Helsingfors-Oslo-Malmö 1956 ff. から、特に多くを得ている。)

1. *hersir* (<Gmc. \**harisja*). 11世紀半ばまでノルウェーで用いられていた首領名称であるが、その正確な概念は全く不明で、種々の説が行われてる(詳しくは、KLNLM VI, 512 f. をみよ)。古典的な解釈は、Snorri Sturluson のいう「彼[ハラルド美髪王]は各州 (fylki) に jarl を置き…各 jarl は自己の下に4名ないしそれ以上の *hersir* を擁するとされた」(*Haralds s. hárfagra*, ÍF XXVI, 98) に基づいて、*hersir* は fylki の下位区分たる *hérað* を支配する者(郡長官)とする。しかし、ノルウェーの歴史学者 A. Holmsen (*Norges historie* I<sup>3</sup>, Oslo-Bergen 1961) はこれを、不穏なノルウェー国家統一時代とヴィーキング時代に軍事力と経済力にその地位の基礎を置いた首領で11世紀になって土地所有者たる「農民貴族」にとって代られた軍人支配者と、考えている。
2. Þorsteinn の父方の一族については、特に *Egils s. Skalla-Grímssonar* (ÍF II) をみよ。＜晩の＞ウールヴが *hersir* と呼ばれている個所は、本文と *Egils s. ch. 27* の詩 (ÍF II, 70) だけである。
3. Jófriðr と Þóroddr については、*Hænsa-Þóris s.* (ÍF III, 42 ff.) に詳しい。しかし、*Húngerðr* については、何も語られていない。本文以外では、*Landnámabók* がこの親子に言及している (ÍF I, 75, 330)。
4. *Egils s.* (ÍF II, 276) は、かれらの子供として娘2人 (Helga, Þóra) と息子8人 (Grímr, Skúli, Þorgeirr, Kollsveinn, Hjörleifr, Halli, Egill, Þórðr) をあげている。そして、長男は、本文でいうようにスクーリではなく、10歳で戦って死んだ (ibid., 291) グリーンムとされている。息子たちの年長順は上に引いたようになり、スクーリは次男、コッルスヴェインとエギルは各々四男と七男になる。

II. ある夏グヴァ川口 (Gufuárós) に海から船が入ってきたと、言われている。その船の船長はベルグフィン (Bergfinnr) といって、生まれはノルウェー人で、財産に富み、<sup>いち</sup> 齢をとっていた。彼は聡明な男だった。<sup>ゴーグディ</sup> 農民ソルスティンは船へ出かけてゆき、どの市でも常に一番発言権をもっており、今度もそうであった。<sup>1</sup> ノルウェー人たちは「越冬のためこの地域に」滞在することとなり、ソルスティンは、彼が頼んだので、船長を屋敷に招いて歓待した。ベルグフィンは冬の間ことば数が少なかったが、ソルスティンはよく彼の面倒をみた。このノルウェー人は、夢に大きな関心をもっていたのである。

春のある日のこと、ソルスティンはベルグフィンに、自分といっしょにヴァルフェル (Valfell)<sup>3</sup> に登る気はないかと訊いた。そこには当時、ボルグ峡湾住民の民会の場所があったのだ。<sup>4</sup> そしてソルスティンは、自分の「民会」小屋の壁が落ちていと言われていた。ノルウェー人は、そうしようと答えた。ソルスティンの下男をいれて彼ら3名は、日中に家を出て、グレニャルという農場に着くまで馬を進めた。そこには、アトリという貧しい男が住んでいた。彼は、ソルスティンの小作人だった。ソルスティンはアトリに、鍬と鋤をもって自分たちといっしょに作業に来るように言った。そして彼らは、ヴァルフェルにある小屋の場所に着くと、全員作業にかかって、壁を修理し直した。

太陽のために暑くて、ソルスティンとノルウェー人には骨が折れた。そして彼らが壁を直し終ると、ソルスティンとノルウェー人は小屋の戸口に腰をおろした。ソルスティンは眠ったが、安眠できなかった。ノルウェー人はその脇に坐って、「そのまま」ソルスティンに夢を見させた。そして目をさますと、彼は疲れを覚えていた。ノルウェー人は彼に、安眠できないようなどんな夢をみたのかと尋ねた。

ソルスティンが言った、「夢にしるしなどがあるものか」<sup>5</sup>

夕方帰路にあったとき、ノルウェー人はまた、ソルスティンが夢で何をみたのかと尋ねた。

ソルスティンが答える、「夢を教えたら、あんたにそれをありのままに説明してもらいますよ」

ノルウェー人は、思い切ってそうしてみようと言った。

そこでソルスティンが言った、「夢の中で、わしはボルグの家において表戸口にいるようだった。そして家の棟に一羽の白鳥のいるのが見えた。見事な美しい白鳥で、それはわしのもので、この上もなく立派なものに思われた。

それから、一羽の大鷲が山から下りてくるのが見えた。それは、こっちに飛んできて白鳥の側にとまってこれにやさしく囁きかけ、それを白鳥は喜んでいようだった。その鷲が黒い眼と鉄の爪を持っているのが見えた。それは勇しく思われた。

次にわしは、南の方から別の鳥が飛んでくるのを見た。それはボルグへ飛んできて、家の白鳥の側にとまり、これと仲よくしようとした。それも大きな鷲であった。これが来ると、はじめに来た鷲はすぐ怒り出したようだった。かれらは長いこと闘い、わしには両方とも血を流すのが見えた。その闘いは、どちらも棟から自分の側に落ちるということで終り、そうして両方が死んで

しまった。そして白鳥は、とり残されて大変落胆し悲しみにくれていた。

そして、それから一羽の鳥が西から飛んでくるのが見えた。それは鷹だった。それは、白鳥の脇にとまって白鳥にやさしくし、それから二羽ともいっしょに同じ方向に飛び去っていった。このとき、わしは目がさめた」 彼がさらに言うには、「この夢は、とるに足らんものだ。これは風を予告していて、この風は、鳥たちが飛んできたと思われた方向から起って、空中でぶつかりあうのだろう」<sup>6</sup>

ノルウェー人が言う、「そうはならないと思いますよ」

ソルステインは言った、「あんたに一番もっともと思われるように、解き明して聴かせて下さい」

ノルウェー人が言った、「これらの鳥は、人の生霊<sup>7</sup>に違いありません。あなたの奥さんは身ごもっており、見事な女の児をお生みになるに違いない。そして、あなたはこの児を大層かわいがられる。立派な男たちが、あなたが鷹が飛んできたと思った方角から現われて娘さんに求婚し、ひと方ならぬ愛情を抱いて彼女をめぐって闘い、そのために二人とも死ぬこととなりましょう。次いで、第三の男が鷹の飛んできた方向からきて彼女に求婚し、彼女はその男と結婚するでしょう。あなたの夢を、そうなると思われるように解いてみました」<sup>8</sup>

ソルステインは答える、「あんたは夢を意地悪く、友情にふさわしくないように解釈した」——続けて言う、「あんたは夢など解き明すことができないのだろう」

ノルウェー人が答える、「あなたはきっと、実際どんな具合になるかご覧になるでしょう」  
ソルステインは「この後」ノルウェー人に対して冷淡になり、彼も夏には発っていった。そしてこの物語から姿を消してしまうのである。

- 
1. 法典 *Grágás* (udg. af Vilhjálmur Finsen, Kbh. 1852, I b, 72) によれば、アイスランドにおけるノルウェー商品の最高価格は、各郡 (*hérað*) において3名の合議で決められることとなっていた。実際には、地区の有力者 (いわゆる *goði*, 各地区に3名) によって決められていたと考えられる。より詳しい叙述は、*Hænsa-Póris s. ch. 2* にみられる。
  2. *austmenn* (sg. *austmaðr*) 字義は「東の男」。アイスランドとブリテン諸島北部では、スカンディナヴィア本土の人間、特にノルウェー人商人を指す (cf. E *easterling*). ノルウェーでは、ノルウェーにいるスウェーデン人に用いられた。Cf. *suðrmaðr* 「南方人、特にザクセン人、ドイツ人」、*vestmaðr* 「西方人、ブリテン諸島人、特にアイルランド人」。
  3. 本文の外は、*Bandamanna s. ch. 12* (ÍF VII, 360) にだけ出ている固有名。おそらく、現在 *Gljúfrá* の西にある *Kambur* と同じであろう。
  4. 共和国時代のアイスランド全国の立法機関は *Alþingi* (大民会) であり、これは全島39名の主領 (*goði*) によって構成された。各地区の相当する機関は地区民会で、3主領がこれを主宰し、春と初秋に開催された (これらは、それぞれ *várping*, *leið* と称される)。

5. Ekki er mark at draumum. 諺的な言い回しで, Örlygsstaðir の戦いの朝に目をさました Sturla Sighvatsson も言っている (*fslendinga s.*, ch. 143).
6. これと似た解釈に, エッダ詩 *Atlamál in grænlenzka* v. 18 にみられる Hogni による Kostbera の夢の解釈がある: いまや風は強まり 疾く激しくならん 白熊 [の夢] は 東よりの吹雪のことなり. (G. Neckel, *Edda* I, 4. Aufl., Heidelberg 1962, 250).
7. *fylgja* (pl. *fylgjur*) 個人や一族の根本的な性格や力の擬人化で, 個人の名前や性格に一致するものをもつ動物(牡牛, 狼, 熊など)の姿をしたもの(たとえば, 狼が象徴する「争いの生霊」*úfriðarfylgja*)と, 多く一族の守護者の性格をもつ女の姿をしたもの(「一族の生霊」*ættarfylgja*)の2種がある。前者は古代の霊魂信仰と関連し, 後者は一族と結びついた女性的存在(女神, 女守護神, 女天使など)である *dis* の崇拝を示すものであろう (KLN M V, 38 f.).
8. この夢とその解釈に関連して, 特に *Laxdæla s.* ch. 33 に述べられている Guðrún Ósvífrsdóttir の夢と Gestr Oddleifsson によるその解釈 (IF V, 88 ff.) が想起されよう。

II. 夏にソルステインは民会に出かける準備をして,<sup>1</sup>家を発つ前に妻のヨーフリーズに言った, 「おまえは身重になっている。もし女の児を産んだら, それを生かしておくことはない。もし男児ならば, 育てろ」 この国が全く異教を信じていた頃, 貧しくて子供を多数かかえていたひとたちが自分の子供を間引くことは, 大体慣わしとなっていた。しかしながら, そうするのは常によくないと考えられていた。<sup>2</sup>

そしてソルステインがこう言い終ると, ヨーフリーズは答えた, 「これは, あなたのよう方には似つかわしくもない言葉ですね。あなたのような裕福なひとがさせるなんて, よいことだとは思いませんでしょう」

ソルステインが答えて言う, 「おまえはわしの気性がわかっており, わしの言うことが守られないと, よくないことになるのを知っているだろう」

その後彼は民会へ出かけたが, ヨーフリーズはその間にとても美しい女の児を産んだ。召使い女たちはその児を彼女のもとへ連れてゆこうとしたが, 彼女は, その必要はあまりないと語り, 自分のところにソルヴァルズという名の羊飼いを呼ばせて言った, 「私の馬をつかまえて鞍をつけ, この児を西のヒャルザルホルト<sup>3</sup>のエギルの娘ソルゲルズ<sup>4</sup>のところへ連れて行って, ソルステインが気づかないようにこっそり育ててくれるように頼みなさい。私はこの児が眼の中に入れても痛くない位かわいくて, この児が殺されるなどとても我慢できないのです。ここに銀3マルク<sup>5</sup>ありますが, これはおまえに駄賃として上げます。またソルゲルズは西で [=北で], おまえに外国へ行く船と食糧を用意してくれます」

ソルヴァルズは, 彼女の言った通りにするのだった。その後, 彼はその児を連れて西のヒャルザルホルトへ行き, ソルゲルズに手渡した。そして彼女は, フヴァム峡湾のレイスィンギャスタズィルに住む自分の小作人に育てさせた。ソルヴァルズのために彼女は, 北の方スケル入江のステイングリーム峡湾で船と旅の食糧を用意してやった。彼はそこから外国へ出かけ, この物語からも消えてしまう。

ソルスティンが民会から帰ったとき、ヨーフリーズは彼に、子供は彼が前に言ったように間引かれそして羊飼いが自分の馬を盗んでいなくなってしまうと言うのであった。ソルスティンは、よくやったと言って、別の羊飼いを雇った。

こうして、このことが知られずに6年経った。その頃ソルスティンは、西の方ヒャルザルホルトの義兄〈孔雀〉オーラーヴ・ホスクルドスソン<sup>6</sup>の屋敷の宴会に出かけた。オーラーヴは当時、西部の首領すべての中で一番尊敬されていた。ソルスティンはそこで、予期通りの歓迎を受けた。

そして、ある日宴会でソルゲルズが上座で弟のソルスティンと話しをして、オーラーヴは他のひとたちと話しをしていたといわれている。かれらの向いの長椅子に3人の少女が坐っていた。

その時に、ソルゲルズは言った、「ソルスティン、私たちの向い側に坐っている娘たちが好ましいとは思いませんか」

彼が答えて言う、「全くその通りです。しかし、ひとりの娘が特に美しい。あれは、オーラーヴの美貌と我らミュール一族の色白と顔かたちをしている<sup>7</sup>」

ソルゲルズは答える、「ソルスティン、あれが私たちミュール一族の色白と顔かたちをしていると言われるのは、たしかに本当ですけれども、孔雀のオーラーヴの美貌はもっていません。彼の娘ではないのですから」

「それはまたどうしてですか」とソルスティンが言う、「しかし、あの娘は姉さんの娘でしょうが」

彼女は答えて言った、「弟御、本当のことを言えば、これはあなたの娘で私のではないのですよ、この綺麗な少女は」

それから彼女は彼に、事の顛末をすべて語って、自分と彼の妻のこの欺きを許してくれるようにと頼むのであった。

ソルスティンは言った、「あなたたちをこのことで責めることなどできません。事柄は十中八九落着く所に向うものですし、あなたら二人はわしの思慮のなさを補ってくれたのです。これほど美しい子をもてるのは大きな幸運だと思う位、この少女が気に入っています。ところで、名前は何といいますか」

「ヘルガといいますよ」とソルゲルズが言った。

「〈麗しの〉ヘルガ」とソルスティンは言った、「わしと家に帰れるようにあの娘の仕度をしてやって下さい」

彼女は、そのようにした。ソルスティンはそれから立派な贈物をもって送り出され、ヘルガは彼といっしょに家に帰り、そして両親と身内みんなの尊重と愛をうけて成長したのであった。

---

1. 夏の民会とは、すなわち, Þingvellir の広原における大民会をいう。ÍF III, Formáli によれば、984年のことである。(以下における年代の引用は、この文献にしたがっておく。)

2. 子供の間引きは、法律に基づいて個人に許されていた (*Íslendingabók*, ÍF I, 17) が、1018年頃にノルウェー王聖オーラヴによって禁じられている (*Óláfs s. helga*, ÍF XXVIII, 74)。
3. *vestr í Hjarðarholt* H. は *Hvammssfjörður* の東岸にあり、ソルステインの館ボルグのほぼ真北50キロ以上の所である。本文のように、*suður* (南に) の反対語として *norður* (北に) の代りに *vestr* (西に) を使用法は、古くから今日までみられる西アイスランドの方言特徴である。この方言で、*norður* は北部地方 (*Norðlendingafjórður*) へ向う行動を表現する場合に限られている。
4. *Þorgerður Egilsdóttir* かの有名なヴィーキング詩人 *Egill Skalla-Grimsson* の長子で、ソルステインの姉。彼女は、当時アイスランド一番の首領と見做された *Óláfr pá* の妻であった。以上のことを作者は予め語っていない。これは、読者側の当然の知識として期待されているわけである。〈孔雀の〉オーラヴについては、特に *Laxdæla saga* を読みたい。
5. 1 *mörk*=8 *aurar*=216 g. 銀3マルクは、牝牛ならば6.4頭に相当する価値があった。
6. *Óláfr pá Hqskuldsson* アイルランド王女を母とし、その美丈夫のゆえに父親から〈孔雀〉(*pá*) と綽名された。
7. *Mýramenn Mýrar* [湿地帯] の人々とは〈晩の〉ウールヴのアイスランドにおける子孫一族を指し、ボルグを祖先伝来の居館にするもっとも有力な家系である。一族の美貌はウールヴの妻 *Salbjörg Berðlu-Káradóttir* の血を受け、エギルなどの醜悪はウールヴの血を引いたためだといわれる (*Egils s.*, chs. 1, 31, 87)。

IV. この頃フヴィート川沿岸地域 (*Hvítársiða*) の上のギルスバッキ (*Gilsbakki*) にハッケル・フロスケルスソンの息子〈黒髪〉のイッルギが住んでいた。<sup>1</sup> イッルギの母は〈野芥子〉のスリーズで、〈蛇舌〉のグンラウグの娘であった。イッルギは、ソルステイン・エギルスソンに次いで、ボルグ峡湾第二の大首領であった。黒髪のイッルギは大地主で、気質の大変きびしい男で、自分の友人はよく護った。彼はインギビョルグを妻にしている、これはオルンノールヴ谷のアースビョルン・ハルザルソンの娘だった。インギビョルグの母は、〈ミズ峡湾〉のスケッキの娘ソルゲルズであった。<sup>2</sup> インギビョルグとイッルギの子供は沢山いたが、この物語には数人しか出てこない。かれらの息子のひとりヘルムンド、別の息子はグンラウグといった。<sup>3</sup> 彼らは二人とも有望な男で、当時まさに一人前になったばかりであった。

グンラウグについて、こう言われている。彼はとても早熟で背が高くて力強く、髪は明るい栗色で大変似合った。眼は黒く、鼻が少し醜かったが、顔だちはよかった。その腰は細く、肩は幅広かった。彼はよく鍛えあげられて、その気性はきわめて我を張る男で、はやくから名譽欲が旺盛で、あらゆることに頑固できつかった。また立派な詩人であったが、いささか中傷的な詩人で〈蛇舌〉のグンラウグ (*Gunnlaugr ormstunga*) と呼ばれた。<sup>4</sup> ヘルムンドは、二人の中で一番人望があって、首領の立居振舞いを身につけていた。

12歳<sup>5</sup> のとき、グンラウグは旅に要る品物<sup>6</sup> をくれるように頼み、自分は外国に行って他のひとの習慣をみてきたいと言った。農民イッルギはそれに冷淡で、父親たる自分が彼をわが家で



立派に饗することなどできそうもないと考えているとき彼が外国で尊敬されることはあるまいと言った。

そして、この少し後ある朝早くのこと、農民イッルギが外に出てみると、彼の倉は開いていて商品の入った袋が6つ倉の前の石敷に置かれていた。鞍敷もいっしょに出ていた。これに彼は大いに驚いた。そのとき、ひとりの男が4頭の馬を連れてきた。それは、息子のグンラウグであった。彼は言った、「袋はオレが外に出した」

イッルギは、どうしてそうしたのかと尋ねた。それは自分の旅のための品物になるものだと、彼は言うのだった。イッルギが言った、「おまえにわしから権威を奪わせはしないし、わしがいいと思うまでは旅にも出さない」

そうして、その袋をまた引きずって中に入れた。

グンラウグはそれから家を飛びだして、夕方ボルグへと下ってきた。農民ソルスティンは彼に自分のもとに留まるように言い、彼もこれを受けた。グンラウグはソルスティンに、彼ら父子の仲がどうなってしまったかを話すのであった。ソルスティンは彼に、好きなだけ長く自分のところに居るようにと言った。

そして彼はこの年ボルグに居て、ソルスティンから法律を学び、誰もが彼を好いた。ヘルガとグンラウグは、いつも盤上遊び<sup>7</sup>をして楽しんだ。その後事実が示すように、二人は互いに対して急速に好意を抱きあうようになっていった。かれらは、ほとんど同年だった。ヘルガはとても美しく、学問のあるひとびとの話によれば、アイスランドに生きた第一の美女であったという位だ。彼女の髪は豊かで、その全身をつつみ隠せるほどであり、延べ金のように綺麗であった。当時、麗しのヘルガのような結婚相手はボルグ峡湾全体、さらに他の所でもないと思われていた。

ボルグでみんなが居間にいたある日のこと、グンラウグがソルスティンに話しかけた、「法律であなただけが私に教えていないことが、ひとつあります。婚約の仕方です」

ソルスティンは言う、「それは造作のないことだ」

そして、彼にその手続きを教えてやった。

それからグンラウグが言った、「では、私がわかったかどうかみて下さい。あなたの手を取って、娘さんのヘルガと婚約するということにしましょう」

ソルスティンは言う、「そんなことは、必要ないと思うが」

グンラウグはすぐに彼の手を握って言った、「でも私にこのことをさせて下さい」

「好きなようにしろ」とソルスティンは言うのであった、「しかし、ここに居合せている者には知っておいてもらおう。この婚約はなされなかったものとされるし、これにはどんなごまかしも隠されてはいないとな」

それからグンラウグは証人の名をあげてヘルガと婚約し、ソルスティンにそれでいいかどうか訊いた。彼は、それでいいと言った。これは、居合せた人たちにとって、大層面白い見ものと

なったのであった。

1. Illugi svartí は、他に主として *Eyrbyggja s.* (ÍF IV) と *Heiðarviga s.* (ÍF III) で知られている。彼の一族も、アイスランドの名家のひとつであった。
2. Þorgerðr Miðfjarðar-Skeggjadóttir 彼女は、正しくは Þorbjörg というのだろう (cf. *Landnámabók*, ÍF I, 84, 140, 212 f.). 彼女の父の諱名は、＜金持＞(hinn auðgi) という。
3. *Landnámabók* によれば、イッルギの子供として、この息子二人の他に、息子 Ketill (ÍF I, 214) と娘 Kolfinna (ibid., 94 f.) がいたという。ヘルムンドは、*Bandamanna saga* のヒーローのひとりである。
4. このグンラウグの描写は多くの点で、*Hallfreðar saga* (ÍF VII, ch. 2) における Hallfreðr vandræðarskáld のそれを想起させる。
5. この読みは、写本 nr 18 にしたがっている；AM 557 xv 「15歳」。これは、前者にしたがえば996年、後者によれば999年のことである。
6. 当時のアイスランドの代表的輸出品たる手織りラシャであることが多い。
7. *tafl* (<Lat. *tabula*) おそらく、「十六六指」<sup>むさし</sup>に似た遊戯。チェス (*skáktafl*) は、1310年頃までアイスランドでは知られていない (cf. KLNII, 223 ff.).

V. 南のモスフェルに、オヌンドという男が住んでいた。<sup>1</sup> 彼はきわめて富裕な男で、南の方岬<sup>ホス</sup>近辺の主領権<sup>2</sup>をもっていた。彼は結婚していて、妻はゲイルニューといった。これは、南のグリンド入江を開拓した＜土色の馬の＞グヌープの息子グヌープの娘であった。かれらの息子は、フラヴンとソーラリンとエインドリズィだった。彼らは全部前途有望な男であったが、フラヴンがどんなことでも三人中一番だった。彼は、背が高く力も強く、大変な美丈夫で立派な詩人であった。彼は完全に成長すると、諸国を旅して、行く先々でよく好かれた。

その頃、南のオルヴスのハッキリに＜賢者＞ソーロッド・エイヴィンダルソンと、当時アイスランドの＜法の宣言者＞<sup>3</sup>であった息子のスカプティが住んでいた。スカプティの母はランヴェイグで、これは＜土色の馬の＞グヌープの息子グヌープの娘であった。だから、スカプティとオヌンドの息子たちは、母方の従兄弟だった。彼らには、この親類関係とともに、親密な友情があった。

同じ頃ラウザメルに＜海豹の＞ソーリの息子ソルフィンが住んでおり、彼には7人の息子がいて、みな有望な男だった。彼らはソルギルス、エイヨールヴ、ソーリといい、<sup>4</sup>この地方で一番有力な人物であった。

いま名前をあげられたひとたちは、みんな同じ時期に生きていた。

また大体この頃に、国全体がキリスト教を信じて、ひとびとが残らず古い信仰を棄てるということここアイスランドにおける大事件が起った。<sup>5</sup>

前に話した蛇舌グンラウグは、6年<sup>6</sup>間かわるがわるボルグのソルステインの所か、ギルスバッキの父親のもとかで、暮していた。彼はその頃18歳になっていて、父子の仲は良くなっていた。

＜黒髪＞のソルケルという男がいた。彼はイッルギの奉公人で、近い親類でもあり、イッルギのもとで成長した。彼は、北のヴァトン谷アースで遺産を相続することになって、グンラウグに自分について来るように頼み、彼はそうした。二人はいっしょに北の方アースに出かけて、財産を手に入れた。グンラウグの仲介で、管理をしていた者たちが、その財産を引渡したのであった。

彼らは北から帰る途中、グリームトゥンガに泊り、ここに住む金持の農民の家で夜を過した。羊飼いが朝グンラウグの馬を使っていて、彼らが見つけたときには馬はひどく汗をかいていた。グンラウグは、その羊飼いを叩きつけて、気絶させてしまった。主の農民は、このことをそのままにしておく気はなくて、その補償を要求するのであった。グンラウグは、農民に1マルク払うと言ったが、相手は、それは少なすぎると思った。<sup>7</sup>そこでグンラウグは詩を詠んだ――

我は1マルクを申し出た  
力なき男<sup>8</sup>に、  
口より血を流せし者の  
しろがね（銀）を受けるがいい。  
物惜しみせぬ者<sup>8</sup>よ  
悔しくおもわれよう、  
もしも黄金を財布に  
入れ損ねたならば。

グンラウグの申し出たもので、彼らの和解はできた。このようにして、二人は南に帰っていった。

それから少し後、グンラウグは再び父に旅のための品物をくれるように頼んだ。イッルギは言う、「今度は、おまえの好きなようにしよう。以前よりも、おまえはかなり良くなったことだし」

そうしてイッルギはすぐに家を出てゆき、グンラウグのために＜番犬＞のアウズンからグヴァ川口に繋ぎとめられていた船の権利を半分買った。このアウズンは、『鯉谷住民の物語』(Laxdœla saga)の中で言われているように、オーラーヴの息子キャルトンの殺された後で＜賢者＞オースヴィーヴルの息子たちを外国に船で運び出そうとはしなかったのである。<sup>9</sup>しかしそれは、このことよりも後のことであった。

そしてイッルギが家に帰ってきたとき、グンラウグはよく礼を言った。黒髪のソルケルが彼といっしょに旅することになって、彼らの品物は船に運ばれた。ところが、みなが船の準備をしている間、グンラウグはボルグにいて、商人たちと作業をしているよりもヘルガと話す方がもっと楽しいと思うのであった。

ある日ソルステインがグンラウグに、自分といっしょにランガヴァトン谷の馬のところへ行かないかと尋ねた。グンラウグは、そうしようと言った。こうして彼ら二人は、ソルギルススタズ

イルというソルステインの放牧家畜用小屋に着くまで馬を進めた。そこにはソルステイン所有の馬が合せて4頭いて、色は栗毛をしていた。そのなかの種馬が大層立派で、まだあまり試されていなかった。<sup>10</sup>ソルステインがこの群をグンラウグにやろうと言ったが、外国に出かけようとしているときに馬など必要でないと語った。それから、彼らは別の馬の方へ行った。そこには4頭の雌馬を連れた灰色の種馬がいた。それはボルグ峡湾随一の馬で、ソルステインはそれをグンラウグにやろうと言うのであった。

彼は答える、「さっきのに劣らずこれも、欲しくはありません。でも、私がもらいたいと思うものを、どうして言ってくれないのですか」

「それは何だ」とソルステインが言う。

グンラウグは言った、「麗しのヘルガ、娘さんですよ」

ソルステインが答えて言う、「それは、そう急に決められない」

それから、話を別のに変えるのであった。そして彼らはラング川に沿って、家の方へ下っていった。

そこで、グンラウグは言った、「私の求婚についてあなたがどのように答えられるのか、知りたいのですが」

ソルステインが答えて言う、「わしは、おまえの戯言など気にはとめん」

グンラウグは言った、「これは私には真剣なことです、戯言ではありません」ソルステインが答える、「おまえはまず、自分が何をしたいのかを知らなきゃならない。おまえは外国へ旅すると決めたのではないのか——それなのに、まるで嫁をもらわねばならないような風をする！おまえがそう落着きのないうちは、おまえとヘルガは釣合う縁組ではないし、そんなことを考えてはならない」

グンラウグは言った、「黒髪のイッルギの息子にやりたくないのなら、あなたは娘さんの結婚相手がどこから来ると思っているのですか。ボルグ峡湾でどこに、イッルギよりも重要なひとたちがいるのですか」

ソルステインが答えて言う、「わしは人の比較はしないが、もしおまえが父親のような男ならば、拒みようがないのだが」

グンラウグは言った、「私よりも誰に娘さんをやりたいのですか」

ソルステインが答える、「ここらには立派な男が多くいる……<sup>11</sup>ラウザメルの子は息子が7人おり、みんな男らしい」

グンラウグは答える、「オヌンドとソルフィンのどちらも親父とは対等の人物ではないし、あなたでも明かに親父には及ばないのですから。それとも、あなたには何か、親父が主領ソルグリーム・キャッラクスン父子とソール岬民会で争って危うくなっていたものを独りで守った<sup>12</sup>のに匹敵するようなことがありますか」

ソルステインが答える、「わしは＜炯眼の＞オヌンドの息子ステイナルを追放したし、それは

大した行ないだと考えられた」<sup>13</sup>

グンラウグは答える、「そのことで、あなたは父上エギルのお蔭を受けました。どっちにしても、私との婚威を拒むことは、大多数の農民にとっていい結果にはならないでしょう」

ソルステインが答える、「脅しは、山の上の連中にみせるがいい。だが、この湿地帯（ミューラル）では、そんなことはおまえに何の役にもたちはしない」

夕方彼らは家に着いた。朝にグンラウグはギルスバッキに上って行って、父親に求婚のためいっしょにボルグへ出かけてくれと頼んだ。

イッルギが答える、「外国に行く決心をしておきながら、今度は求婚でせわしない様子とは、落着きのない男だ。わしには、そういうのがソルステインの気性に合わないことが、わかっている」

グンラウグは答える、「でも、それでも私は外国へ行きます。これを援けてくれないというのなら、面白くありません」

そうして後、イッルギは総勢12名でボルグに向けて家を出、ソルステインは彼を歓迎した。

[翌]朝早く、イッルギはソルステインに話しかけた、「あんたと話しをしたいのだが」

ソルステインが答える、「ボルグ [の丘] に上っていき、あそこで話そう」<sup>14</sup>

彼らはそうし、グンラウグもついて行った。

そこでイッルギは言った、「息子のグンラウグが、自分のために娘さんのヘルガに結婚を申込むためあんたに求婚の話を切出したと言っているんだが、わしは、この件について結局のところどうなるのかを知りたい。あんたは息子の血筋やわたたちの財産のことはご存じだし、もしそうするのがもっと適切ならば、屋敷も主領権も惜しむものではない」

ソルステインが答える、「わしはグンラウグにひとつだけ欠点を認めているが、それは彼が落着きがないと思えることだ。彼があんたのような気性をもっているのなら、ためらうことは無いも同然なのだが」

イッルギは答える、「あんたがわしら父子に対等の縁組を拒みなされば、このことは、わたしたちの友誼の終りということになりましょう」

ソルステインが答えて言う、「折角のお言葉とわしらの友情のために、ヘルガはグンラウグの内々の許嫁にしましょう、正式の婚約者ではなくて<sup>15</sup>。そして3年間は待たせることにする。グンラウグは外国に行って、立派なひとたちの習慣を身につけてこなけりゃならない。だが、もし彼がそのようにして帰らなかったり、その性格がわしの気に入らなかったりすれば、約束はすべて解消される」

こうして、彼らは別れた。イッルギは自宅に、グンラウグは船に戻るのであった。そして順風になったとき、彼らは海に出て、船をノルウェーの海岸沿いに北へ進め、スラーンドヘイムの海岸に沿ってニザロース<sup>16</sup>に入って、そこで船を繋いで、荷を降した。

1. Qnundr が Mosfell に住んでいたという記述は、本文と *Hallfreðar s.* ch. 11 (ÍF VIII, 196) 以外には見当たらない。
2. goðorð「主領 (goði) たること、その権利 (行使地区)」。より詳しくは、「大阪外国語大学学報」21号 (1969年) 139, 註3)を参照。
3. lögsgumaðr 大民会の主宰者で、アイスランド共和国ただ一つの公職であった。その主要任務は、毎夏大民会において国法を3分の1ずつ朗誦することで、任期は3年で、再任を認められていた。この Skapti Þóroddsson は、この任を実に9期にわたって (1004—1030年) 務めた。これは最長記録である。
4. *Landnámabók* (ÍF I, 98) には、Þorfinnr Sel-Þórisson の7人の息子として、Þorkell, Þorgils, Steinn, Galti, Ormr, Þórormr, Þórir があげられている。しかし、この中には、本文で息子とされている Eyjólfur の名はない。
5. アイスランドにおけるキリスト教の採用は、1000年とされている (cf. *Íslendingabók*, ch. 7)。
6. AM 557 ii *vetr*「2年」; Wimmer *prjá vetr*「3年」。
7. 他人の所有物の無許可使用の刑は、3マルクの罰金であり (*Grágás*, I b, 61), 他人を殴打して気絶せしめることに對するそれは、法の保護の剝奪 (skóggangr) とされていた (ibid., I a, 149)。このふたつの刑を比較して農民は、グンラウグの申し出額が少なすぎると考えたわけである。
8. 相手の農民を指している。
9. *Laxdæla saga* は、1250年前後に成立した<アイスランド人のサガ>の大作のひとつで、古い伝統的な英雄主義・ヴィーキング精神を底流としながらも、南欧の騎士道文学にも強く影響されたロマンスである。ヒロイン Guðrún Ósvífrsdóttir を中心とする男たちの葛藤、特に孔雀のオーラヴの息子 Kjartan とその従兄弟 Bolli の争いを描く。(山室静「美女記」、雑誌『展望』1968年11月第119号227頁以下は、このサガの概略紹介である。) 本文で言及されていることは、妻グズルーンとその兄弟たちに煽られたボリがキヤルタンを殺害した直後、グズルーンの兄弟たち、すなわちオースヴィーヴルの息子たちが国外追放の刑を受けたときの出来事である。このためにオースヴィーヴルに呪われたアウズンは、その夏にフェロー諸島で難破して死んだという (ÍF V, 158 f.)。
10. 往時のアイスランド人にとって大きな娯楽であった馬の喧嘩 (hestaetja, -víg) において。
11. 次のグンラウグの言葉からみて、この箇所には、オヌンドの息子たちに関する叙述があったと考えられる。
12. この争いについて、*Eyrbyggja s.* ch. 17 には、「この民会でソルグリーム・キャッラクスソンとその息子たちが黒髪のエイルギと、ティン・フォルニが面倒をみていたエイルギの妻インギビョルグ・アースビアルナルドゥーティルの結納金と持参金について、争った……ティン・フォルニは、エイルギの要求通りの金を準備した。」(ÍF IV, 31) とある。
13. ソルスティンとステイナルの、後者による前者の放牧地不法使用に関する争いについては、*Egils s.* chs. 80—84 をみよ。
14. 丘陵や山はよく、神聖なものと考えられている。本文は、*Eyrbyggja s.* ch. 28 にみられる主領スノッリの言葉「ではわしらは、Helgafell [聖山] へ上ってゆこう。あそこで決められた相談なら、無駄は万々ない。」(ÍF IV, 72) を連想させる。
15. heitkona (内々の許嫁), festarkona (正式の婚約者)。法律の規定に基づいて証人をたてて行う正式の婚約 (festar) によって定められた女が festarkona である。この婚約を破棄する場合には、男 (festarmaðr) は結納金を、女は持参金を、それぞれの相手側に支払うものとされていた。これに対して、heit は単なる約束であり、その履行は当事者双方の誠意に依っていた。
16. 古語でいう Þrándheimr (Þrond-) は、今日の Nordmøre と Namdal の間にある地方 (現在の Trøndelag) を意味し、Nið 川口に発達した古い都市たる Niðaróss は、今日 Trondheim (より古くは Trondhjem) と称している。

VI. この頃、ノルウェーはハーコンの息子エイリーク公とその弟スヴェインが治めていた。<sup>1</sup>エイリーク公は当時、フラズイル<sup>2</sup>に滞在して父祖伝来の地にあり、強大な支配者であった。スクーリ・ソルスティンスソンはその頃、公のもとにあって、その近侍の中で大変重んぜられていた。<sup>3</sup>

グンラウグとく番犬の>アウズンは総勢12名でフラズイルに入ったと言われている。グンラウグは、灰色の短上着と白い靴下つきズボン<sup>4</sup>という出で立ちだった。その足の甲には根太ができていて、彼が歩くと、血と膿が流れ出すのであった。そんな恰好で彼とアウズンたちは、公に目通りをし、ふさわしい挨拶を述べた。公はアウズンを知っていて、これにアイスランドの消息を尋ね、アウズンが出来事を伝えた。公はグンラウグに誰かと訊き、彼は公に自分の家系と名を告げた。

公は言った、「スクーリ・ソルスティンスソンよ、これはアイスランドでは如何なる人物か」

彼が言う、「上様、この者を歓迎なさいませ——アイスランド随一の人物ギルスバックの黒髪のイッルギの息子で、私の乳兄弟です」

公は言った、「アイスランド人よ、そちの足は如何いたした」

「根太ができていますのです、上様」と彼が言った。

「それでも跛をひかなかったのか」

グンラウグが答える、「両の脚が同じ長さをしている間は、跛をひくものではありません」

すると、ソーリという名の公の近侍が言った、「このアイスランド人は、大きなことを吹きおる。何かこやつを腕を試すのがよろしかろう」

グンラウグは、彼を見やって言った——

近侍のひとりありて

いたく性わるし。

彼を信ずるには用心あれ

彼はよこしま(邪)かつ不吉なれば。

それで、ソーリが斧を擱もうとした。

公は言った、「静かにせよ。さようなことを氣にとめるでない。ところでアイスランド人よ、そちは何歳になるか」

グンラウグが答えて言う、「只今18歳でございます」

「わしの見込みでは、そちはもう18年生きることは、まああるまいな」と公は言う。

グンラウグが静かに言った、「私の上に呪いを願われますな。それよりも、ご自身のためにお願いなさいますように」

公は言った、「いま何と申した、アイスランド人よ」

グンラウグが答える、「そうあるべきだと思われたように、申しあげたまでです。あなたは私の上に呪いを願われずに、ご自身のためにもっとよいことをお願いなさるようにと」

「それは、どういうことか」と公が言う。

「あなたが、お父上ハーコン公のような最期の日<sup>5</sup>をお迎えになりませんようにということです」

公は、血の如く真赤になって、このたわけ者を即刻捕えよと命じた。そのときスクーリが公の前に進み出て言った、「上様、私めの言葉に免じてこの男にご慈悲を賜り、できるだけ早く立ち去らせて下さい」

公は言った、「もしそやつが命を惜しければ、できるだけ早く立ち去るがよい。そして今後再びわが王国に現われぬことだ！」

そこでスクーリはグンラウグを連れて船着き場に行った。そこでは、イングランド行きの船が出港の用意ができていた。そしてスクーリは、グンラウグとその親類ソルケルのため、乗船できるようにしてやった。グンラウグはアウズンに、自分の船と残してゆく財産の保管を任すのであった。

こうして、グンラウグたちはイングランド海<sup>6</sup>へと船を出し、秋に南の方ロンドン港に着いて、船を陸に揚げたのである。

- 
1. Eiríkr jarl と Sveinn jarl は、Hákon jarl hinn ríki Sigurðarson (ハーコン大公) の子で、デンマーク国王 Sveinn Haraldsson およびスウェーデン国王 Óláfr Eiríksson (cf. IX) と結び、宿敵たるノルウェー国王 Óláfr Tryggvason (オーラーヴ1世) を国外に追い出した(1000年)。二人はデンマーク国王の副王として、両国王が獲得した地方を除くノルウェーを共同で治めた(1000—15年)。なお、エイリークは、1015年にクヌート大王と共にイングランドに渡り、Northumbria の支配者になっている。
  2. Hlaðir 今日のトロンヘイム市の東約3キロの所にある Lade のこと。ノルウェー最初の全国統一者ハラルド美髪王の最大の館があったという (*Haralds s. hárfagra*, ÍF XXVI, 100)。
  3. Skúli は、ヒロインのヘルガの兄で、エイリーク公の *stafnbúi* (forecastle-man, きわめて優れた戦士がこれに選ばれた)。公がオーラーヴ1世を破った戦いに参加した (*Egils s.* ÍF II, 300; *Óláfs s. Tryggvasonar*, ÍF XXVI, 358)。なお、I の注4をも参照されたい。
  4. leist(a)brœkr ソックス (leistar) とズボン (brœkr) がひとつになっている衣服。この灰色の地味な装いは、古いスカンディナヴィアの典型的な日常の身なりである。後出の豪華な服装と比較してみよ。
  5. 公の父ハーコン大公は、オーラーヴ1世の追求を受けたとき、信頼していた奴隷 Karkr とともに味方 Þóra af Rimul の豚小屋に身を隠していたが、結局はこの奴隷の手にかかって命を落すという惨めな最期をとげたといわれている (*Óláfs s. Tryggvasonar*, ÍF XXVI, 296 ff.)。
  6. Englandshaf 北海のこと。

VII. 当時イングランドは、ヤートゲイルの息子アザルラーズ<sup>1</sup>が治めており、彼はこの冬、ロンドンにあった。当時イングランドの言語は、ノルウェーやデンマークと同じであったが、<sup>2</sup><脇腹の>ヴィルヒャールム<sup>3</sup>がイングランドを征服したとき、イングランドでは言語がかわってしまった。これから後は、王がフランスの出だったので、フランス語がイングランドで一般になった。

グンラウグはすぐに国王に目通りをして、立派にまた丁寧に挨拶した。国王は、彼がいかなる国の者かと尋ねる。グンラウグは、それを告げる。



「そして陛下、あなたにお目にかかりたく参上いたしました。と申しますのは、あなたについて詩を作りましたからです。その詩をお聴きいただきたいのです」

王は、そうするがよかろうと言った。グンラウグはその詩を見事に雄々しく詠んだが、その折返しはこうである――

つわもの（兵）はみな神の如くに畏れる  
気前よろしきイングランドの君を。  
戦さに猛き王の族、ひとの子の族は  
アザルラズがおん前にひれ伏す。

王は彼に詩の礼を述べて、極上の毛皮がつき縁までレースで飾られた錦<sup>4</sup>のマントを彼に詩の謝礼として賜り、自分の近侍とした。そしてグンラウグは冬中、王のもとに留って重んぜられた。

ある日朝早く、グンラウグは通りで3人の男に出会った。彼らの頭目はソーロルムという名で、背が高くて力があり、甚だ厄介な男であった。彼が言った、「おい北歐人、俺にいくらか金を貸してくれ」

グンラウグは答える、「見も知らぬ男に自分の金を貸すのは、利口なことではないな」

相手が答える、「決められた日には返す」

「それなら、思い切って貸そう」とグンラウグは言って、相手に金を渡すのであった。

それから少し経って、グンラウグは国王に会って、この借金のことを告げた。王が答える、「それは拙いことをした――こやつは、とんでもない悪党の海賊<sup>5</sup>なのだ。彼とは係わりあいをもつな。そちには、わしが同じだけ金を遣わす」

グンラウグは答える、「それでは、あなたの近侍たる私どもは満足にお仕えしていることにはなりません――私どもは、何の罪もない人たちを踏みじめることになり、このような悪漢を自分の上にのさばらすこととなります。絶対そのようなことは、あってはなりません」

それから少し後、グンラウグはソーロルムに会い、金を返すように言ったが、彼は払う気などないと言うのであった。そこでグンラウグはこの詩を詠んだ――

戦士よ、汝は  
我が黄金を返さぬとは  
さほど賢からず、汝は  
戦士なる我を欺むけり。  
知るがよい、我が  
＜毒蛇の舌＞と名づけられしを  
若き我に故なくつけられしにはあらず、  
今こそそれを思い知らせん。

グンラウグが言う、「法にかなった方法を取らせよう。わしに金を返すか、さもなければ3日の期限でわしと決闘をしろ<sup>6</sup>」

すると海賊は笑って言った、「おまえ以外は、これまで誰も俺に決闘を挑んだ者はないぞ。多くの連中は俺に齒が立たんのだな。これは喜んで承知するぞ」

グンラウグと海賊は、こうしてその場は別れた。

グンラウグは、事の次第を王に語った。彼が答える、「これは、全く大変なことになってしまった——この男は、いかな武器をも鈍<sup>なまくら</sup>にしまうのだ。そちは；わしの言うようにするがよい。ここに剣があるが、これをそちに取らそう。闘いはこれで行え、だが相手には別のを見せよ」

グンラウグは、王に篤く礼を述べた。

さて、決闘の用意ができたとき、相手の持っているのは如何なる剣かとソーロルムは尋ねるのであった。グンラウグは相手にそれを抜いて見せたが、国王拝領の剣は柄に紐の輪を結んで手首につけていたのであった。

その剣を見て、狂戦士<sup>7</sup>が言った、「そんな剣は、恐しくもないわ」

そう言って、剣をグンラウグに斬りつけ、彼の楯をあらかた斬り碎いてしまった。すぐにグンラウグは国王拝領の剣で斬り返したが、狂戦士は身を護ることもなく突っ立ち、相手が自分に見せたのと同じ剣を使っていると思っていた。しかし、グンラウグは直ちに彼に最期の一撃を加えたのであった。

国王は彼にこの手柄について礼を述べ、彼はこのためイングランドと広く他の所で非常な高名を博すこととなった。

春に諸国間を船が往来するようになると、グンラウグは王にしばらく旅をする許しを願い出た。そうして何をしたいのかと、王は訊いた。

グンラウグが答える、「約束しましたことを果したいのです」

そして、この詩を詠んだ——

みたりの王とふたりの公の  
御館をば訪なわん、  
こを我は同胞(はらから)に  
約束したり。  
戦士なる君のお召しのなきうちは  
我は御許に戻らじ、  
気前よき君は賜う  
袖の下におく黄金を。

「そうするがよかろう、詩人よ」と王は言って、彼に6オンスの重さの黄金の腕輪を与えた。「だが、次の秋にはわしのもとに戻ってくると約束してくれ。そちを、その腕前と勇気の故にわが側より離したくはないのだな」

---

1. Aðalráðr Játgeirsson Ethelred II the Unready (イングランド王, 979—1016) のこと。グンラウ

グは、1002—03年の冬の間ロンドンの王のもとに滞在した。

2. 1000年頃まで、北欧人とアングロ・サクソン人はわずかの努力で相手の言葉を理解し得たようである。両者の言語（古ノルド語と古英語）は、互いに外国語として認識されることが少なかったであろうことが想像される（英語 *egg, sister, law, die, take, they, them, same* etc. は、ノルド語からの借用語である）。
3. Vilhjálmr bastarðr ノルマンディ公ロベールの庶子 William I the Conqueror (英国王, 1066—87) のこと。ここでいう征服とは、英国史上の the Norman Conquest (1066) のこと。
4. skarlat 主としてドイツや低地諸国の産物。
5. vikingr この語が、本文のように軽蔑の意味で一般に使われるようになったのは12世紀以降である。日本語にみられる外来語「バイキング」の意味をも参照。
6. ganga á hólm 小島 (hólmr) へ決闘のために行くこと (名詞 hólmganga)。これは法律の定めに基づく行為であり、その勝者は正義とされる試罪法的性格をもち、単なる一騎打ち (einvigi) とは本来異なる。しかし、語法の実際をみると、両語がかなり混同されて使用されていることがわかる。決闘規則 (hólmgöngulög) については、*Kormáks saga*, ch. 10 (ÍF VIII, 237 f.) に詳しい。この種の決闘は1000年頃まではかなりで普通であったらしく、サガ文学では特に *Egils s.*, *Kormáks s.* にその記述が多くみられる。本文 **XI** も参照されたい (Cf. KLNMI VI, 653 ff.)。
7. berserkr (おそらく <berr + serkr “bearsark”)。戦闘中に精神的に異常な状態に陥り、まるで狼や熊のように狂暴になる (berserksgangr, MLat. *furor bersercius*) 者をいう。これは、一種の狼狂 (lycanthropy) であろう。民間伝承によれば、この状態にある者は防具を身につけず闘い、彼には火も武器も歯が立たないという。これと類似のものとして、*úlfheðnar*, *skipta hómum*, *hamask* がある。(cf. KLNMI I, 501 f.; *Ynglinga s.* ch. 6 (ÍF XXVI); *Egils s.* chs. 1, 28)。

**VIII.** それからグンラウグは、イングランドから商人たちとともに北の方ダブリンに渡った。当時アイルランドは＜絹髯の＞スィグトリュグ王が支配し、これは＜サンダルの＞オーラーヴ王とコルムロズ女王の息子だった。<sup>1</sup> 彼はその頃、王国を支配するようになってから未だ間がなかった。グンラウグは国王に目通りをして、立派に丁寧<sup>2</sup>に挨拶をし、王は似つかわしく彼を迎えるのであった。グンラウグが言った、

「あなたについて詩を作ったのですが、お聴き願わしうございます」

王は答える、「これまで誰もわしのために詩を作ってきた者はないし、是非聴こう」

そこでグンラウグは、ドラーパ調<sup>2</sup>の詩を詠んだが、折返しはこうである——

スィグトリュグは屍にて  
狼を養いはぐくむ。

また、こういうものもある——

我は知るなり  
己がいかなる王の子を  
褒め讃えんとするかを、  
そはクヴァーランが子なり。  
気前のよさを身につけておわし

君は我に惜しみ給わず  
黄金の腕輪を、  
それを詩人は疑うことなし。

王よ、のたまえ  
これに優れる詩を  
聴かせ給いしか、  
こはドラーバ調なり。

王は彼にその詩の礼を述べ、お側に内蔵頭を呼んで言った、「この詩に、どう礼をしたらよい  
か」

相手が答えて言う、「陛下は、いかがお望みでしょうか」

王は言う、「商船2隻を遣わしたとしたら、いかが酬いたことになるか」

内蔵頭が答えて言う、「それは多すぎます、陛下。他の王様方は詩の謝礼には見事な財宝とか  
すばらしい剣とか立派な黄金の腕輪とかをお与えになっておられます」

王は彼に、自分の新しい錦の服とレースの短上着、そして極上の毛皮裏のマントに重さ1マル  
クの黄金の腕輪を賜った。グンラウグは、王に篤く感謝して、そのもとにしばらく滞在し、そこ  
からオークニー諸島へ行った。

当時オークニー諸島は、フロズヴィルの息子スィグルズ公が支配していた。<sup>3</sup>彼はアイスランド  
人に好意的であった。グンラウグは公に立派に挨拶して、自分には公に献げる詩があると語っ  
た。公は、彼がアイスランドでさほど有力な人物であるからには、その詩を聴いてみたいと言  
うのであった。グンラウグはその詩を詠んだが、それはフロック調<sup>2</sup>で立派な出来ばえだった。公  
は詩の謝礼として彼に銀細工の戦斧を与えて、自分のもとに留まるように言った。

グンラウグは彼に贈物と招待の礼を述べて、自分は東の方スウェーデンに行かなければなら  
ないと語った。そしてそれから、ノルウェーに行く商人たちと同船して、秋に彼らは東の方コヌ  
ンガヘッラ<sup>4</sup>に到着した。彼の親類ソルケルが、いつもいっしょであった。コヌンガヘッラから彼  
らは、道案内を連れて西ガウトランドに入ってゆき、スカラル<sup>5</sup>という市場町に着いた。

そこはスィグルズという公<sup>6</sup>が治めていて、公は老年にあった。グンラウグは彼に目通りを  
し、立派に挨拶して、彼について詩を作っていると語った。公は、よく耳を傾けていた。グンラ  
ウグはその詩を詠んだが、それはフロック調であった。公は彼に礼を述べて立派な褒美を与え、  
冬は自分のもとに居るようにと勧めた。これはグンラウグも受けた。

スィグルズ公は、冬に豪勢な冬至<sup>7</sup>の宴を設けた。冬至前日に、北の方ノルウェーからエイリ  
ーク公の使者が総勢12名到着した。彼らは、スィグルズ公に贈物を持参してきたのである。公は  
彼らを歓迎して、冬至の間グンラウグの側の席をあてがった。

酒盛は、大変にぎやかだった。そこでガウト人が、スィグルズ公に優るすぐれた名高い公はいないと語った。ノルウェー人は、エイリーク公の方がはるかにすぐれていると思った。このことをめぐって彼らは議論し、この問題について両方ともグンラウグを判定人を選んだ。そこで、グンラウグはこの詩を詠んだ――

武士たちよ  
ここの公について御身らは語りあう  
彼は高き波を見てきぬれども  
今や白髪のお翁なり。  
軍人なるエイリークは自ら  
東なる猛り狂う海原にて  
さらに数多の青き大うねりを  
舳先に見ておわす。

双方ともこの判定に満足したが、ことにノルウェー人たちはそうであった。使者たちは、スィグルズ公がエイリーク公に贈った金銭の贈物を持って、冬至の後にそこを發った。こうして使者たちがエイリーク公に、グンラウグの判定について語ることとなったのである。公は、グンラウグが自分に対して公平と好意を示したと感じて、グンラウグが彼の国に安全な避難所を見出せる旨の命令を公けに広めさせた。<sup>8</sup>

スィグルズ公は、グンラウグが頼んだ東の方スウェーデンのティーウンダランド<sup>9</sup>へ行くのに要る道案内をあてがってやった。

- 
1. Sigtryggr silkiskegg は、996年頃からダブリンのノルウェー人王国を支配するようになった王。しかし、アイルランド全体の国王は、Brjánn (Ir. Brian) であった。Óláfr kváran (<OIr. *cuarán* サンドル) は、長きにわたってダブリン王国の支配者であり、海外のヴィーキング君主としてもっとも人望があった (981年没)。彼は3度結婚をし、最後の妻が Kormlǫð (Ir. Gormflaith) である。彼女は後に、Brjánn と再婚した。(cf. *Njáls saga*, chs. 154—157)。
  2. drápa 王侯を称えるスカールド詩型のひとつ。この詩型は、2、3あるいは4節ごとに、2あるいは4行からなる折返しを伴う。これに対して、flokkr はこの折返しをもたない型である。前者は国王のための、後者はそれ以下の君侯・首領のための頌歌に使われるとされていた。本文次章のグンラウグの言葉を参照されたい。
  3. Sigurðr jarl Hlǫðvisson オークニー諸島およびスコットランド北端地方の支配者 (c. 980—1014) でキリスト教に改宗した。1014年、ダブリン王国側にたって Brjánsorrosta (the battle of Clontarf) に参加し、戦死した (*Óláfs s. helga*, ÍF XXVII, 159 f.)。
  4. Konungahella 現スウェーデン領 Bohuslän の Kungälv の近くで、Göta älv の川口にあり、Göteborg の北方20キロ位の所。
  5. Skarar Västergötland 中北部にあり、今日 Skara という。グンラウグは、ここに1003—04年の冬に滞在した。

6. Sigurðr jarl. B. M. Ólsen (*Om Gunnlaugs saga orms tungu*, Kbh. 1911, 43 f.) は、西暦1000年以前に Rognvaldr Úlfsson がスカラル公になっていることを指摘して、このスィグルズ公が果して実在人物であるのかと、疑問を呈している。ÍF の編者 Sigurður Nordal はさらに、この人物は作者の手になる仮空の人物であり、本章末の詩は作者が作ったものであると考えている。そして、前章の最後の詩の中でグンラウグが言及している2人の公とは、ノルウェーのエイリーク公とオークニーのスィグルズ公を意味しているとも言っている (ÍF III, Formáli LXII f.)。
7. jól 異教時代最大の祝祭。ふつう1月6日までの13日間にわたり、その宴 (jólaboð) はキリスト教のクリスマスよりも遅い日に行われたようである。
8. グンラウグが以前エイリーク公からノルウェー入国を禁じられたことを、想起されたい。
9. Tiundaland スヴェーア (スウェーデン人の故地 Uppland) の中心地方で、古都ウプサーラがある。

IX. この頃スヴィーア国 [スウェーデン] は、＜スウェーデン人の＞オーラーヴ王が治めていた。彼は、エイリーク勝利王と、＜戦さ好きの＞トースティの娘＜高慢ちきの＞スィグリーズとの息子だった。<sup>1</sup> 彼は強い名高い国王で、大変栄誉心の強い人物であった。

グンラウグは、彼らスヴィーア人の春の民会<sup>2</sup>の時期近く、ウプサーラに到着した。そして王に目通りをすると、彼は王に挨拶をした。王は彼を歓迎して、彼は誰であるかと尋ねた。彼は、自分はアイスランドの者ですと語った。当時オーラーヴ王のもとに、オヌンドの息子フラヴンがいた。

王は言った、「フラヴンよ、彼はアイスランドではいかなる人物か」

<sup>しも</sup>下の長椅子からひとりの背の高い雄々しい男が立上って、王の御前に進んで言った、「陛下、彼は名家の出でありまして、本人もきわめて勇敢な人物です」

「では、この者を連れてゆき、そちの側に坐らせよ」と国王は言う。

グンラウグが言った、「陛下に献げたき詩がございます。それをお聴かせいたし、お聴きいただきとうございます」

王は言う、「まず行って坐れ。いまは詩に耳を傾けている暇がない」

彼らは、そのようにした。

それから、グンラウグとフラヴンはいっしょに語りはじめ、互いに自分の旅について語りあった。フラヴンは、夏にアイスランドを発ってノルウェーに旅して冬の初めに東の方スウェーデンにやって来たと話した。彼らはまもなく、意気投合するようになったのである。

民会が終了したある日、グンラウグとフラヴンの二人はいずれも国王の御前にあった。

そこで、グンラウグは言った、「さて陛下、私の詩をお聴きいただきとうございます」

「そうするがよかろう」と王が言う。

「それでは陛下、私も詩を詠みたいと思いますが」とフラヴンが言うのであった。

「それもよかろう」と王は言う。

グンラウグが言う、

「それでは陛下、およろしければ、まず私の詩を申しあげようと思います」

フラヴンは言う、「陛下、私が先に詠むべきであります、私が先に御許に参ったのですから」

グンラウグが言う、「われらの父親の間で、わが父が汝が父に劣るということが、どこであったか。どこでもありはしなかった！われらの間もそうなければならない！」

フラヴンは答えて言う、「このことで争いをせぬように礼儀<sup>3</sup>をわきまえようではないか、そして王様に決めていただこう」

王は言った、「グンラウグに先ず詠んでもらう、自分の意志を通さぬと気にさわるようだからな」

そこでグンラウグが、オーラーヴについて作ってあったドラーパ調を詠んだ。そして、そのドラーパ調が終ると、王は言った、「フラヴン、詩は如何な出来ばえじゃ」

「結構です、陛下」と彼が言う、「グンラウグ自身の性質のように、大仰でヤボで少々堅苦しい詩ですが」

「では、そちの詩を詠むがいい、フラヴンよ」と王は言う。

彼がそうし、それが終ると王は言った、「グンラウグ、この詩の出来ばえは如何じゃ」

グンラウグが答えて言う、「結構です、陛下。フラヴン自身の顔つきのように綺麗ですが、平凡です。ところで、なぜ王様についてフロック調の詩を作ったのか。それとも、陛下がドラーパ調に値なさらぬと考えたのか<sup>4</sup>」

フラヴンは答えて言う、「これについてはもう話すまい——先になろうが、このことは改めて取り沙汰にされようぞ」

その場はこうして、二人は別れた。

少し経ってから、フラヴンはオーラーヴ王の近侍にされて、旅に出る許しを請うた。そして、王はこれを許した。フラヴンは旅の準備ができたとき、グンラウグに言った、「われらの友情はこれで終りだ、おまえはわしを首領の面前で中傷しようとしたからな。いつか必ず、ここでおまえがわしにしようとしたことに劣らぬ辱しめをおまえにしてやる」

グンラウグが答えて言う、「おまえの脅しなどに恐れをなすものではない、わしがおまえよりも低い栄誉を受けることはどこでもあるまい」

オーラーヴ王は別れに際してフラヴンに立派な贈物を与え、その後に彼は出発した。

フラヴンは春に東を発って、スラーンドヘイムに着き、自分の船の仕度をして、夏にアイスランドへ向けて船を進めた。船を「モスフェル」荒原の下のレイラ湾にいれ、身内や友人が彼を迎えて喜んだ。その冬、彼は父のもとに居ることになった。

そして夏に大民会<sup>5</sup>で2人の親類、＜法の宣言者＞スカプティと＜詩人の＞フラヴンが会った。そのとき、フラヴンが言った、「ソルスティン・エギルスソンに娘ヘルガとの結婚を申し込むのに、あんたの援けが欲しいと思っている」

スカプティは答える、「あれはもう、蛇舌グンラウグと内々に婚約しているのではないか」

フラヴンが答えて言う、「彼らの間で決められた期間は、もう過ぎてしまっているのではない

か。その上、あの男の思いあがりはひどくなっていて、このことに気をとめているとか注意していると、とても言えない位だ」

スカプティは答える、「あんたの好きなようにやろう」

それから、彼らは大勢の者を伴って、ソルスティン・エギルスソンの民会小屋<sup>6</sup>に行った。彼は彼らを歓迎した。

スカプティは言った、「親類のフラヴンが娘さんのヘルガに結婚を申し込もうと思っていますが、あなたは彼の家系や豊かな財産や育ちの良さ、身内と友人の強力さを存じておられる」

ソルスティンが答える、「娘はもうグンラウグと内々に婚約しており、彼との決められた約束を守ろうと思っているが」

スカプティは言った、「あなたの方間で決められた3年は、すでに過ぎたのではないのですか」

ソルスティンが言った、「その通りだが、まだ夏は終わっていないし、彼はこの夏に帰ってくるかもしれない」

スカプティは答える、「では、もし彼がこの夏中に帰ってこないならば、そのときわしらはこの問題についてどんな希望がもてますか」

ソルスティンが答える、「ここにまた来年の夏に来よう、そしてその時に、どうするのが一番いいか考えましょう。だが今はこれ以上このことを話しても無駄だ」

そういうことで彼らは別れ、ひとびとは民会から家に戻った。フラヴンがヘルガを欲しがっているというこの話は、公然の秘密となった。

その夏グンラウグは帰国せず、次の夏スカプティたちは例の求婚を強く持ち出して、もはやソルスティンがグンラウグとのあらゆる約束に縛られなくなったと話すのであった。

ソルスティンは答える、「わしには、面倒を見るべき娘が数人しかいないが、<sup>7</sup>あれらが誰にとっても争いの種になって欲しくないのだ。それで先ず、黒髪のイッルギに会いたい」

そして、彼はそうするのであった。彼らが会うとソルスティンは言った、「わしが息子さんのグンラウグとのどんな約束にも[もはや]縛られはしないと考えるか」

イッルギが言った、「もしお望みならば、たしかにその通りだ。わしは息子のグンラウグのことについて全くわからないので、今あまりこのことについて言うことはない」

そこで、ソルスティンがスカプティを訪ねて、彼らはこう話を決めた。もしその夏にグンラウグが帰国しなければ、結婚式は冬入りの日<sup>8</sup>にボルグで行われるが、もしグンラウグが帰ってきて約束を果すことを求めれば、ソルスティンはフラヴンとの約束すべてに縛られないものとするというのであった。その後、彼らは民会から家に戻った。そして、グンラウグの帰国は遅れ、ヘルガは新しい約束を嫌がるのであった。

(つづく)

---

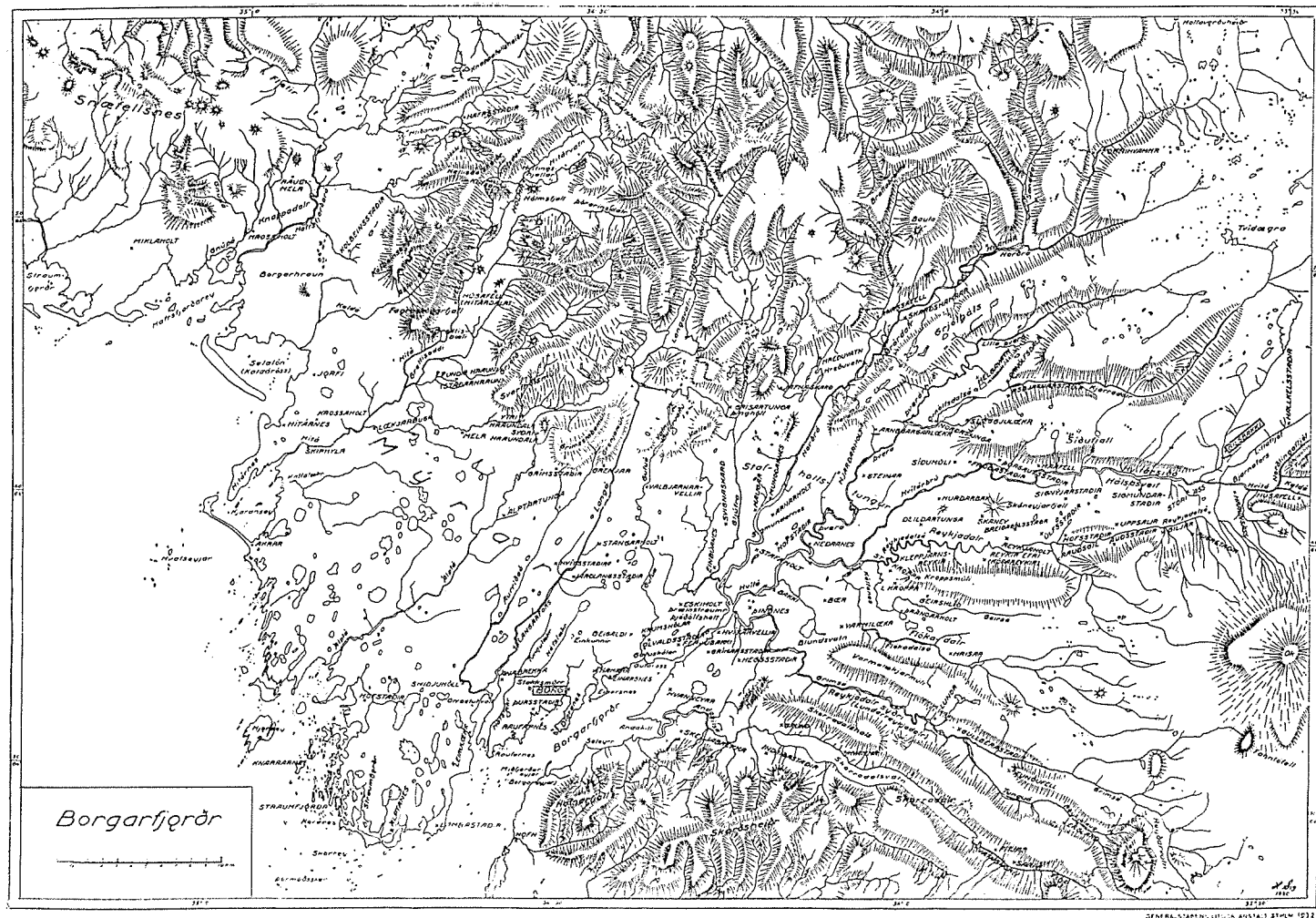
1. この Óláfr (c. 995—1024) は、同名のノルウェー国王たち (Óláfr I Tryggvason, Óláfr II helgi



Haraldsson) との混同を避けるため、サガ文学では *soenski* <スウェーデン人> と綽名されている。彼の父 Eiríkr Bjarnarson (995年頃没) が *sigrsæli* <勝利者> と綽名されるようになったのは、Fyrirsvellir (Swed. Fyrisvallarna) の戦い (c. 980—85) で甥の Styrbjörn Sviakappi とデンマーク王 Haraldr Gormsson を破った後であろう。オーラーヴ王の母 Sigríðr は、夫エイリーク王の死後、ノルウェー王オーラーヴ1世と、ついでデンマーク王スヴェイン (Ⅵ注1をみよ) と結婚する。彼女はエイリークの死後に、ノルウェーの Haraldr grenski や Garðaríki (ロシア) の Visivaldr (Vsevolod) の求婚に対して、彼らをひとつの館に眠り込ませて焼き殺してしまった。このとき彼女が、自分に求婚して来る他国の小王にはこのように振舞うと言ったために、*stórráða* <高慢ちき> と呼ばれるようになったという (*Óláfs s. Tryggvasonar*, ÍF XXVI, 287 ff.)。

2. スノッリによれば、「スヴィーア国では、異教が行われていた間、大犠牲祭がゴーイ月〔2月中旬から3月中旬までの30日間〕にアップサーウで行われることが、国の古い習慣であった。平和と国王の勝利のために犠牲がその折に捧げられ、ひとびとが全スヴィーア国からそこへ行くものとされていた。全スヴィーア人の民会がその際にそこであることになっていた。そのときそこでは市(いち)や店がたち、1週間続いた。しかし、スヴィーア国でキリスト教が行われるようになると、そこで大民会(*logping*)と市が開かれている」(*Óláfs s. helga*, ÍF XXVII, 109)。この古い異教の犠牲祭は *disablót* (女守護神 *dísar* への奉納祭) と呼ばれ、我々はこれを Adamus Bremensis (11世紀) から知ることができる。
3. *kurteisi* <OF *cortoisie* 又は <OE *curteisie*, 南欧ロマンス文学の影響を露わしている外来語。
4. 前章注2を参照。ある詩人(*Þórarinn loftunga*) がクヌート大王についてフロックを作ったためにその怒りを買ひ、翌日ドラーバを作るように命ぜられ、このドラーバは *Höfuðlausn* (首の贖い) と呼ばれたという (*Óláfs s. helga*, ÍF XXVII, 307 ff.)。
5. 1005年の大民会。スカプティは前年、法の宣言者に選出されていた。
6. *búð* 民会の開催中(大民会はふつう2週間)、参会者が臨時の宿泊所として使用した建物で、4つの(ビートなどで造った)壁で囲まれているだけで屋根がなく、したがって使用する際には天幕などで屋根をつける(*tjaldla búð*) 必要があった。
7. *Egils s. ch.* 79によれば、ソルスティンには2人の娘がいた。本文Ⅰ注4を参照。
8. *vetrnætr* 10月11日から17日の間の日曜日に始まる最初の冬季の月のはじめ3日のこと。一般には、冬の始まりをいう。

サガの舞台となった南西アイスランド (ÍF III, Reykjavík 1938.)



GENERALSTABEN, LITEN, KÖPMANNSSTR. 1, 101, KÖP. 1938